



## 第3分科会

### 「世界よ、きてけろ！ ～国際交流員としゃべてみねが？～」

●担当：三上英司（山形大学地域教育文化学部教授）、鈴木正和（山形県国際交流室）

キム・キョンミン（山形県国際交流員/韓国出身）、エリカ・テルフォード（山形県国際交流員/イギリス出身）

ミチコ・ヨシノ（山形県国際交流員/アメリカ出身）、王茹雪（山形県国際交流員/中国出身）

●分科会のねらい・目的：

- ・国際交流員の活動を知ってもらい、参加者が今後、自分の所属する団体で国際交流員を活用してもらう契機とする。
- ・ワークショップを通し、同じテーマでも国際交流員それぞれで見解が違うことを知り、多様性の理解につなげる。

●参加者人数：34名

#### 1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
国際交流員の自己紹介	<p><u>各国の国際交流員の自己紹介</u></p> <p>・4名の国際交流員が「出身の国と都市」、「趣味」、「好きな食べ物」、「日頃どんな仕事をしているか（翻訳、通訳、小学校・中学校・高校での出前講座、AIRYのイベント企画・運営）」などの話を交え、自己紹介を行った。</p>
<p>ワークショップ</p> <p>ファシリテーター： 三上 英司</p>	<p><u>グループ討議</u></p> <p>【テーマ：「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて海外からたくさんのお客様を受け入れるため、日本（山形）は何をするべきか」】</p> <p>① A, B, C, Dの4グループに分かれ、上記のテーマについてグループ討議を行った。各グループには国際交流員1名が加わり、国際交流員がA→B→C→Dのようにグループを移動することで、1つのグループで合計4回、異なる国際交流員をメンバーに入れて同じテーマについて討議を行った。</p> <p>② 討議で出た各意見は、4名の国際交流員に対応し4色の付箋紙を使い、国際交流員との討議の中で感じた意見を各グループの模造紙に張り付けていった。</p> <p>③ グループでそれぞれ作成した4種類の意見を掲示し、他グループのものと比較した。グループ討議に国際交流員が入れ替わり参加し、同じテーマについての討議を行った結果、海外からお客様を受け入れるにあたっての山形の強みや課題、その対応策に関し、同じような意見が出た一方で、グループに入った国際交流員により異なる意見が導き出される例もあった。</p> <p>《国際交流員による違いがなかったもの（共通意見）》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公共交通機関の利便性をもっとよくする。</li> <li>・キャッシュレス、ICカードが使える場所を増やす。</li> <li>・外国語表記の看板を増やす。</li> <li>・SNSでの情報発信。</li> <li>・Wi-Fi環境の整備 など。</li> </ul>



	<p>《国際交流員によって違う結果となったもの》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「温泉をもっとPR すべき」、その一方で、「温泉ばかりPR されても、温泉に入る文化がない国もある。そうした国の人への理解も必要。」との意見もあった。</li> <li>・山形の観光における強み、力を入れるべきものについて、「日本酒」、「歴史」、「見るだけではない、体験型の観光」、「外国人向けの観光ツアー」、「宗教の違いに対応する」など、グループに入った国際交流員それぞれの違った視点からの提案があった。</li> </ul>
<p>まとめ</p> <p>ファシリテーター： 三上 英司</p>	<p>まとめ</p> <p>国際交流員がそれぞれ討議の中で印象に残ったことを発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国の方から山形に来てもらうためにアピールするものとして、「山形を舞台とした映画やドラマなど」が活用できる。</li> <li>・東京のアンテナショップを活用した山形県の情報発信や、熱心な観光ボランティアを活用すべき。</li> <li>・東京オリンピック・パラリンピックはスタートであり、オリ・パラリンピック終了後に来県するリピーターの獲得が大切。</li> <li>・東京や大阪、京都に来た外国人観光客に来日の2回目以降に山形に来てもらうため、まずは関東圏、関西圏の日本人に山形の魅力を知ってもらうことが必要。</li> <li>・最後に、ファシリテーターから、「4名の国際交流員が印象に残ったことはそれぞれ違う。さらに国際交流員はA,B,C,Dと4つのテーブルを回り、それぞれのテーブルで同じ内容の意見を言おうと準備していたが、テーブルを回らる中で自分の話す内容も変わっていった。人と人とが『交流』するということは、お互いに話し合うことによって自分自身のものの見方が変わっていく、気が変わっていく、ということ。今回のワークショップそれを体験していただけたと思う。」と締めくくり、まとめとした。</li> </ul>

## 2. 参加者アンケート

- ・国際交流員の方4名とそれぞれお話できたのがよかった。一人ひとり考え方が違うのでお話を聞いていて、興味深かった。
- ・日本人では分からない、他国と比較したときの視点を聞くことができた。自分も視野を広げ、より多角的な視点から物事を見ることができるようになりたい。そして世界を理解したい。
- ・国際交流員と話してみて、外国の人から見た日本や山形の素晴らしいところ、改善点などを知ることができ貴重な機会だった。特に新鮮だったのは2回目以上の旅行者を対象にするという点でオリンピック・パラリンピックがスタートであるという話に現実味があり、よいと思った。
- ・グループワークをするなかで、国によっても全く考え方が違うということが発見できた。山形の魅力と山形への導線づくりが改めて必要だと感じた。

## 3. 担当者所感

【鈴木正和（山形県国際交流室）】

サブテーマ「国際交流員としゃべてみねが？」のとおり、参加者から国際交流員と気軽に話してもらい、国際交流員の活動を知ってもらうという目的は概ね達成できたと思う。

ワークショップのテーマを「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて海外からたくさんのお客様を受け入れるため、日本（山形）は何をするべきか」という、参加者が興味を持って参加できそうなものにしたため、活発な討議が行われた。ワークショップを通して国際交流員それぞれの考えの違い、そこから導き出される多様性についても参加者から感じてもらえたと思う。今回は高校生の参加者が多かったが、参加者からの口コミなどで、国際交流員の活動について多くの方に知ってもらい、活用につなげていければよいと思う。